第４回研究会

〈景観を楽しむ、地域を作る〉フットパス

―フットパスづくりの経験を踏まえて―

龍谷大学法学部３回生
本田　大輝
龍谷大学法学部・教授　里山学研究センター・センター長
牛尾　洋也
龍谷大学・非常勤講師　里山学研究センター・研究員
須川　　恒
龍谷大学・名誉教授・研究フェロー　里山学研究センター・研究員
江南　和幸
龍谷大学法学部・教授　里山学研究センター・研究員
鈴木　龍也

以下のような報告があり、それぞれについて活発な質疑がなされた。

１．本田大輝・牛尾洋也 「学生が取り組むフットパスの可能性―東近江市における実験を踏まえて―」
①本田大輝「東近江市におけるフットパスのあり方について―これまでの活動を踏まえて―」
②牛尾洋也「フットパスの社会的意義について―世界の動向を踏まえて―」
２．須川亘「地域資源可視化ツールとしてのフットパス」
３．江南和幸「英国に先立つ100年前に始まる江戸時代庶民が楽しんだ「パブリックフットパス」の源流―「都名所図会」、「拾遺都名所図会」、「都林泉名勝図絵」、「江戸名所図会」に溢れる庶民の遊山（＝パブリックフットパス）の楽しみ」
４．鈴木龍也「イギリスにおける自然アクセス制度の新展開とWAWの取り組み」

「学生が取り組むフットパスの可能性」においては、まず本田氏が、フットパス先進地におけるフットパス運動の経緯や現状、フットパスづくりが地域に与えた影響等について現地調査をもとにしてまとめたうえで、自らが東近江市でこの間取り組んできたフットパスづくりの経緯や成果、さらには今後の課題、そして学生がフットパスづくりに取り組む可能性等について報告した。

それを受け、牛尾氏は、より広い視点から、フットパスの意義や価値、世界各地のフットパスの状況やそれを支える法制等について、土地所有権観念等との関連に注目しつつ、紹介を行った。

須川氏は以前から、地域資源を可視化することが、須川氏が特に関わってきた湿地や里山の

保全に大きな役割を果たすこと、そして地域資源を可視化するツールとしてフットパスが有用であることを強調してきた。本研究会での報告では、氏が近年具体的に関わりつつあるフットパス運動を取り上げ、具体的なフットパス運動の現場に近い場面に触れることで得られた、そこでの人々の新しい関係性構築の可能性という視点などをも含め、フットパス運動の重要性について再論した。

江南氏は、『都名所絵図』、『拾遺都名所図会』、『江戸名所図会』等々、江戸時代の「景勝地案内」を素材に、江戸時代に開花した「花とそれを巡り歩く遊山」の文化こそ、市民が「自然を楽しむというPublic Footpathの思想」の、イギリスより早い、そしてそれとは独自に展開した源流と見ることができるとする報告を行った。日本における変化に富んだ植物種の存在、江戸時代の太平の中での町民文化の成熟等、市民が「自然」を楽しむ文化の成立や成熟を考えるにあたって考慮すべき重要な視点が提供された。

鈴木は、イギリスにおける自然アクセス制度について、フットパスに加えて、2000年に成立したCountryside and Rights of Way Actにより導入されたAccess Land についての制度的な説明、そしてそのような形での自然アクセス制度が展開してきた経緯や背景、現在の問題状況等について説明した後、近年のイギリスにおける自然アクセス運動の社会的意味を象徴するものとして、日本におけるフットパス運動と同様、地域振興をめざした活動としてイギリス全土において急速に広がっているWalkers Are Welcome運動について紹介した。

フットパスについて様々な方向からの報告が行われたため、質疑もそれぞれの報告について行われ、研究会としてまとまった方向を確認するような議論には至らなかったが、報告同様質疑においても、フットパスが地域作りにとってもつ可能性について多く語られることになった。

特に、本研究会で具体的に取り上げられた東近江市のフットパスに関係する方々が参加されていたこともあり、東近江市における各地域の状況やこれまでの地域作りの経験を踏まえて、フットパスづくりの困難さや可能性、地域作りにとっての意義等について興味深い議論が行われた。ただし、残念ながら、十分に深められるには至らなかった。十分な議論の時間がとれなかったというだけでなく、フットパスについて、未だ十分な理解に至っていないためと思われる。

フットパスは日本において現実には極めて多様な形で存在している。そのため、その地域社会における意義を一義的なものとして示すことは困難である。したがって、フットパスの多様なあり方のそれぞれに応じた検討が必要とされている。里山学研究センターとして、東近江市などのフットパスの具体的な取り組みに参与しつつ、フットパス論を展開する課題を確認することができた、といえようか。（鈴木龍也）